

(実践報告)

タブレットの録音機能を用いた歌唱学習のあり方

～心理的負担の軽減と評価の妥当性の向上を目指した歌唱試験の実施を通して～

篠原昂太 (対馬市立雞知中学校 音楽科教諭)

三上次郎

(長崎大学教育学研究科)

1 要旨

本実践では、歌唱試験の際にタブレット端末による録音機能（ロイロノート・スクール）を用いることで、以下の2点において一定の効果があることが示唆された。(1) 生徒の心理的負担の軽減が見込める。(2) 評価する際に、聴くことに集中することができたり、聴き直しができたりするため、評価の妥当性が向上する。

2 はじめに

「歌唱の試験がある日は、保健室に来る生徒がいる。」これは、生徒指導の引き継ぎで挙げられた本校の実態である。歌唱の試験は、個人の技能習得の状況を評価するうえで、効率的な方法であり、多くの学校で実施されている。しかし、前述した生徒のように、歌唱の試験に対して、心理的な負担を感じている生徒もいる。教師が評価をするために歌唱の試験を行い、本来目指すべき音楽科教育の姿から離反しては本末転倒である。評価することが目的となり、生徒が歌を歌うことに対して、マイナスに捉えてしまうという現状があるのではないだろうか。

歌唱の試験における問題点は、評価者の立場からも挙げられる。例えば、ピアノで伴奏しながら試験をする場合、「ピアノを弾きながら、生徒の歌を聴き、評価をする。」という同時作業になってしまう。1クラス30名程度の学校で、個人を評価するとなれば、現実的ではあるが非効率的である。また、生徒の演奏を正確に看取するという責任を果たすうえでも、集中して聴き、評価することができないという点で問題がある。他にも、評価の妥当性の面において課題がある。例えば、一般のコンクールなどでは、審査員が一人で審査に当たることはほとんどない。審査に妥当性をもたせるためには当然である。しかし、学校現場では、音楽の教員一人で歌唱の試験を実施することが現実である。この現状から妥当性を高める方法が求められていると考えた。

転勤を機に、今年度から赴任した対馬市の学校では、生徒全員にiPadが貸与されていた。この環境を活用して、前述した課題の解決を図るため、実践に取り組んだ。

3 実践記録

タブレットを用いた歌唱の試験は、1学期に、第2学年及び第3学年、2学期に全学年で実施した。また、2学期には、歌唱の試験における質問紙を用いた調査を実施した。今回は、以下の2つの実践を検証する。

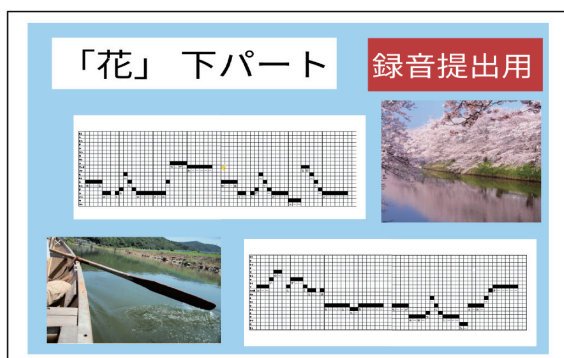
【検証1】第三学年における「花」を用いた実践（1学期）

【検証2】全校生徒169名を対象とした質問紙調査の実施（2学期）

【検証1】第三学年における「花」を用いた実践（1学期）

歌唱の試験では、1番の主旋律と副旋律を試験範囲として実施した。生徒は、これまでに混声合唱の学習に取り組む中で、他のパートとの音の重なりを感じる活動を行っている。しかし、同じ楽曲において、複数のパートを歌った経験はない。今回は、主旋律と副旋律の2つのメロディを歌い分け、それぞれの音の重なり方の違いを感じさせることを目標とした。

2つの旋律を歌い分けることが難しい生徒のために、視覚的に音の上下を識別することができるシートを用いた。指で追いながら歌うだけでなく、タブレット上のシートに直接ペンで音の動きを記入しながら歌ったり、実際に自分の歌声を聴き直したりすることで、正しい音が再生できるように練習を行った。



「シートの写真」



「歌唱の試験前の様子」

歌唱の試験では、学級全員が一斉に歌い、タブレットで個人の声を録音する形態と男女各2名ずつ4名によるパート発表の形態の2回で実施した。

検証の結果、これまでの試験の形態よりも時間的にかなりの余裕を生み出すことができた。また、イヤホンを用いて、その場でフィードバックすることにより、自身の課題に気づかせることもできた。生徒の反応は、「自分が思っていたよりも下手に聞こえた」という生徒がほとんどで、客観的に聴く機会があることによつて、次のステップを明確にすることができると考えられる。

教師による演奏の評価は、教材研究の時間にイヤホンを用いて実施した。ピアノを弾きながらではなく、聴くことに集中することができるため、従来よりも妥当性が高まる評価が可能になると感じた。また、記録として残っているため、聴き直しをすることができる点においても有効である。

【検証2】全学年169名を対象とした質問紙調査の実施（2学期）

2学期は、合唱コンクールで取り組んだ各学年の課題曲を題材として歌唱の試験を行った。今回は、試験後に実施した質問紙と歌唱試験の結果の相関関係を分析した。質問項目は、（1）人前で歌唱することに対する意識と（2）歌唱の試験の形態を対象とした。

結果は、以下の通りとなった。

【技能との相関】

（1）人前で歌うことに自信があると答えた生徒29名のうち、技能の評価が4以上生徒の割合は93.1%であり、3以上の生徒は100%である。

【タブレットを用いた歌唱試験に対する生徒の意識】

（2）回答者157名のうち、「iPadを使って、みんなで歌う」における4段階評価の3・4に該当する生徒数93.4%である。また、人前で歌うことが得意ではないと答えた生徒は80.9%であり、人前で歌うことに抵抗があると答えた生徒は63.7%である。

（1）人前で歌唱することに対する意識については、質問紙で答えた生徒の歌唱に対する意識と実際に今回の歌唱の試験で評価した結果の相関を分析した。結果は、人前で歌うことに自信がある生徒や好きな生徒は、歌唱の技能が高い傾向にあるということが分かった。この技能とは、正しい音を再生する能力とした。技能の評価の結果が4以上の生徒は93.1%となり、3以上の生徒は100%である。このように、人前で歌うことに自信がある生徒や好きな生徒は、歌唱の技能が高い傾向にあることが分かった。

（2）歌唱の試験の形態については、全校生徒169名への調査に対して、調査可能であった157名に絞って分析を行った。全体の生徒については、苦手であるという想定の場合、「iPadを用いて、みんなで歌う」形態を望んでいる傾向があり、4段階評価の3・4に該当する生徒は93.4%となった。

本校の生徒の実態として、人前で歌うことは得意ではない生徒は8割を超え、抵抗感を抱いている生徒も少なくない。また、生徒が習得している技能と人前で歌うことに対する意識には、相関があり、人前で歌うことに自信がない生徒は、自信がある生徒に比べて、技能の習得が進んでいない傾向にある。さらに、本校の生徒は、苦手であると想定した場合、タブレット用いた歌唱試験の形態を望んでいる生徒が全体の93.4%いた。以上のことを踏まえると、本校の実態においては、生徒の希望と方策がかみあった試験の形態として、iPadを用いた歌唱の試験には一定の効果が見込めるのではないかと考えられる。

歌唱試験における質問紙調査

1 歌のテストについてあなたの思いを教えてください。

(1) 私は歌のテストが好きである。

4	好き	3	どちらかというが好き	2	どちらかというと嫌い	1	嫌い
---	----	---	------------	---	------------	---	----

(2) 私は人前で歌うことが好きである。

4	好き	3	どちらかというが好き	2	どちらかというと嫌い	1	嫌い
---	----	---	------------	---	------------	---	----

(3) 私は人前で一人で歌うことができる。

4	できる	3	どちらかというとできる	2	どちらかというとできない	1	できない
---	-----	---	-------------	---	--------------	---	------

(4) 私は人前で一人で歌う自信がある。

4	ある	3	どちらかというとある	2	どちらかというとない	1	ない
---	----	---	------------	---	------------	---	----

(5) 私は人前で歌うことに抵抗はない。

4	ない	3	どちらかというとない	2	どちらかというとある	1	ある
---	----	---	------------	---	------------	---	----

(6) 歌のテストによって「からかわれた」経験がある。

4	ある	3	どちらかというとある	2	どちらかというとない	1	ない
---	----	---	------------	---	------------	---	----

2 歌のテストのシチュエーションについてあなたの考えを教えてください。

《選択肢》

①音楽室でシーンとした状態で、一人で歌う。	②音楽室でざわざわした状態で、一人で歌う。
③別室で、一人で歌う。	④音楽室で、ipadを使って、みんなで歌う。

(1) 歌のテストのシチュエーションであなたはどれが良いですか？（番号で）

(→ → →)

(2) 理由

--

(3) ちなみに、あなたは歌が得意だとします。歌のテストのシチュエーションはどれが良いですか？

(→ → →)

(4) あなたは歌が苦手だとします。歌のテストのシチュエーションはどれが良いですか？

(→ → →)

4 結果

質問紙調査において、人前で歌うことに自信がある生徒や好きな生徒は、評価

の結果が4以上の生徒93.1%と歌唱の技能が高い傾向にあること、苦手であると想定した場合、タブレットを用いた歌唱試験の形態を望んでいる生徒が全体の93.4%いたことなどからiPadを用いた歌唱の試験では、心理的負担の軽減に効果があることが示唆された。

歌唱試験の形態をタブレットによる一斉試験にすることで、評価する教師が聴くことに集中することができたり、聴き直しをすることができたりすることで評価の妥当性においても有効性が示唆された。

5 考察と今後の展望

今回の実践では、一斉に歌唱試験を実施し、タブレットで記録することで心理的負担の軽減や評価の妥当性の向上に効果があることが示唆された。特に、生徒が自分の歌唱をイヤホンで聴くことで客観的に捉え見直しをする機会となったり、自分の声を聴かれないということによる心理的配慮が実践できた。ただ、客観的に捉えることで生まれる心理的負担があることも見受けられたため、配慮が必要である。

歌唱の試験を一斉に実施することで、時間の短縮を見込むことができた。また、人前で一人で歌わなくてもよいという心理的負担の軽減においても効果があった。ただし、周りの声に合わせて歌うことができるという面においては、技能の看取りとしては不十分であるとの見方も懸念された。

音声を記録するということによって、評価の妥当性が高まることや生徒自身も自身の成長に気付くことができた。今後も自身の声を蓄積することで、変容に気付くツールとして発展的な使用方法を見出していきたい。

参考・引用文献一覧

横溝 (2018) 音楽科実技科目におけるルーブリック評価の導入. 郡山女子大学紀要 54. 179-194

酒井 (2012) 全米学力調査音楽における表現課題評価方法の変遷. 音楽教育ジャーナル 10 巻 1 号. 90-102

本田 (2011) 中学生向け合唱練習用ラーニングシステムの開発. 第 73 回全国大会講演論文集 2011. 453-454

小畑 (2019) 中学生の歌唱における「音痴」意識. 宮城教育大学紀要. 53

菅 (2019) 歌唱領域における中学生のメタ認知的方略の使用と有効性認知. 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要. 47-62

篠原 三上 田中 西田 (2016) 比較聴取を取り入れた歌唱授業の実践～～. 教育実践総合センター紀要 15. 429-436